

恩恵と自由意志 エラスムスとルターの自由意志論争

柳沼正広

はじめに

二十五年前の一九九三年、当研究所の創立者池田大作先生は、ハーバード大学において「21世紀文明と大乘仏教」と題して講演されました。ここでは、二十一世紀の最重要課題として生と死の問題が取り上げられ、大乘仏教が二十一世紀以降の文明に貢献しうる点とともに、宗教のあるべき姿が三つの視点から論じられました。第一の視点は「平和の創出」、第二は「人間の復権」、第三は「万物の共生」というものでした。

このうち第二点目の人間の復権では、人間にとって宗教をもつことの意義が問われ、仏教でいう他力と自力、キリスト教でいう恩恵と自由意志のバランスの在り方が問題とされました。そして「自力はそれのみで自らの能力をまっとうできない。他力すなわち有限な自己を超えた永遠なるものへの祈りと融合によって初めて、自力も十全にはたらく。しかし、その十全なる力は本来、自身の中にあつたものである」と述べられています。このようなことを念頭に置きながら、本発表では、キリスト教の歴史でも名高いエラスムスとル

ターの恩恵と自由意志についての論争を取り上げたいと思います。

ルターの登場と『主張』

十六世紀の宗教改革は、マルティン・ルターが、教会による贖宥状の販売を問題にしたことから始まりました。いわゆる「九十五カ条」の論題を掲げてルターが贖宥状について討論を呼びかけたのは一五一七年の十月であることはよく知られています。罪の許しは悔い改めを通して神によってのみ与えられるものであり、教皇から金銭によって買えるようなものではないと訴えたのでした。ここには、人間は自分の意志や行いによって救いを得ることができるのかという問いがあります。その翌年、ルターは、ハイデルベルクで開かれた仲間の修道会の総会において、人間は自分の行いによって救いを得ることはできないこと、人間の自由意志も悪へと向かう能力しか持たないことを論じました。今から五百年前の一五一八年四月のことです。

その後ルターは、自説を撤回することを求められま

したが拒否したため、一五二〇年には、教皇が破門警告の大勅書を出します。その大勅書では、それまでのルターの説が四十一項目にわたって異端的誤りとして挙げられていました。ルターはすべての項目について回答する『主張』(Assertio)を書きますが、この『主張』では教皇、公会議、サクラメントなどの他の制度的な問題の中にあつて、自由意志と恩恵の問題がとくに重点的に論じられています。

『主張』の第三六項⁽²⁾では、まずハイデルベルクで論じられた命題「墮罪後の自由意志は、単なる名前だけのものであつて、それが『自分自身のなかにあることを行う』かぎりは、死に至る罪を犯しているのである」⁽³⁾が取り上げられます。ここで「自分自身の中にあることを行う」とは自分の生来の能力を発揮するということとです。つまり自分自身の力によって恩恵を得ようとすることの否定です。ルターはアウグスティヌスの言葉「自由意志は罪を犯すことだけにしか役立たない」⁽⁴⁾を引用し、さらに「ヨハネによる福音書」[一五・五一六]を引用します。「わたしを離れては、あなたがたは

何もできないからである。私につながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう」⁽⁵⁾。このようにキリストが「何もできない」と言っているにもかかわらず、自由意志が恩恵に向かうことができると主張する教皇は、自らの主に逆らう者だとルターは批判しました。

エラスムスの『自由意志論』

エラスムスは、このルターの『主張』を読んで『自由意志論』を書いたとされていますが、その正式名称は『自由意志についての審議あるいは比較検討』⁽⁶⁾というもので、ルターの『主張』とは、かなり性格が異なるものです。断固たるルターの『主張』に対して、比較検討に基づく審議を呼びかける姿勢には、このような問題を扱うに際して、一方的に判定を下したり、他の見解を全否定するような強硬な態度は、キリスト教徒の一致を損なうものだと批判が込められています。『自由意志論』では実際、聖書の中で人間の自由意志を

肯定していると思われる箇所と、自由意志を全く排除していると思われる箇所をそれぞれ検討していくスタイルをとっています。

エラスムスは、自由意志の肯定と否定が併存している箇所が、新約聖書の中でも神の恩恵を特に強調するパウロにおいても見られることを指摘し、その例として、「フィリピの信徒への手紙」[二・一一―一三]を挙げます。そこでパウロは「恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい」と説きながら、続けて「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです」とも言っています。

エラスムスは、このような、人間に努力するように求めながら神がすべてを行っていると説く矛盾と思われる多くの箇所を説明するには「意志の努力を神の恩恵の助けに結びつけさえすれば」⁽⁷⁾よいと言います。先ほどのパウロの言葉についても、神と協力して努力しようとする私たちの意志や願いをも、神が私たちのうちに働きかけたのだと結論できると述べています。⁽⁸⁾こ

の恩恵と自由意志の関係は次のようにも説明されます。長くなりますが引用します。

正統的な教会教父のうちの若干の人が、人間の働きに三つの段階を区別していることである。すなわち、第一が考えつくこと、第二がやろうと欲すること、第三がやりとげること、の三つである。彼らは第一と第三の段階には「自由意志」が働くいかなる余地も残していない。なぜなら、私たちの精神はただ恩恵によってのみ善を考えつくようにいざなわれ、また恩恵によってのみ考えたことをやりとげるように促されるのであるから。しかもなお、中間段階、すなわち、やろうと同意する段階では、恩恵と人間の意志とは同時に働いているのである。だが、その場合にも、恩恵が主要原因として働き、私たちの意志は主要原因よりは弱い原因として働いているのである。したがって、事ごらの全体は、すべてが完遂されるように事を運ばれたかたに帰せられるのであって、人間が善きわ

ざのうちからそのある部分を自分のものだと主張するなどということはありうべきことではないのである。なぜなら、同意して神の恩恵と協力するという⁽⁹⁾ことも神の贈物だからである。

これで自由意志が弁護されているのだろうかとも思われますが、エラスムスの意図は、カトリック教会も本来は自由意志の役割をほとんど認めていないことを示すことにあると思われます。

そのうえでエラスムスは、結論部分で、「ローマの信徒への手紙」〔八・二六〕の「同様に、⁹霊も弱いわたしたちを助けてくださいます」との言葉を引いて、弱いとは何もできないことではなく、やろうと努力して完遂する力のないことであり、助けるということも、何かをしている者を助けているはずだ、と聖書に「助け」という言葉がある以上、自由意志が働く余地がほんのわずかであるが残されていると強調します。そして次のように述べます。

したがって、「人間は神の恩恵の助けによるのでなければ何一つなしえない。それゆえに、人間のわざは一つとして善ではない」と結論する人々に對して、むしろ私の考えではこの方がありそうだと考えられる次の結論、すなわち「人間には神の恩恵の助けによってできないというものは何一つない、それゆえに、人間のあらゆるわざは善でありうる」を、私たちは提出する。したがって、聖書のうちに《恩恵の》助けに言及している個所があればあるだけ、それだけ「自由意志」が確立している個所があることになる。そしてそのような個所は数えきれない、だから証拠の数から事が評価されるとすれば、勝利は私のものであるだろう。⁽¹⁰⁾

このように書いた後、エラスムスは、カトリック教会と改革者たちの争いを念頭に置きながら、贖宥状によって人々の良心を罷にかけるようなやり方も、人間は原罪によってその能力を完全に破壊されていると主張することも、キリスト教についての極端な誇張であ

り、この誇張同士の対立が世界を騒然とさせていると述べます。さらに自分の見解が受け入れられても人間は自らの意志や行いを信頼すべきではないというルターの主張は損なわれないことが明らかになるように望むと述べています。

ルターの『奴隸意志論』

『自由意志論』が出版された翌年の一五二五年の十二月にルターの『奴隸意志論』が出ます。この中でルターはエラスムスを手厳しく批判しています。『自由意志論』は対立する見解の比較検討であると先ほど申し上げましたが、ルターはこの点について、エラスムスは聖書の權威を重んじながら結局教会の諸教令に従い、自らの考えを主張しない態度をとっていると批判して「主張を好まないというのはキリスト者の精神ではない。むしろ、主張を好まなければならぬのであって、そうでなければキリスト者ではない⁽¹¹⁾」と述べています。

またエラスムスが、自由意志を擁護して恩恵と共に何事もなすことができるとした結論についても、恩恵

なしには自由意志は何もできないことを認めているものとして次のように述べています。

君は、「自由意志」の力を、微弱な、神の恩恵なしでは、全く効力のないものとしている。君もこれは認めるだろう。それでは私はお尋ねする、そして答えてもらいたい。もし神の恩恵がかけているか、あるいは、この微弱な力から取り去られているかしたら、この力自身はいつたいなにをなしうるのか。(君の言うところでは)、(それは効力がなく、なんら善いことをなさない)。実際、私たちは恩恵がそれから引き離されているとしたのだから、それは神あるいは神の恩恵が欲することをなしえないであろう。そして、神の恩恵がなさないことは、善ではない。したがって、神の恩恵抜き「自由意志」は、全く自由ではなく、むしろ単独では自己を善に向けえないのであるから、《自らを》かええないようにとらわれた悪の奴隷である、という⁽¹²⁾ことになる。

二人の相違

エラスムスとルターの対立点は、人間の救いは全く神の恩恵によるか、あるいは、そこに人間の自由意志の関与があるのかにあります。これはキリスト教の根本にかかわる問題であり、五世紀にもペラギウス派とアウグスティヌスによる論争がありました。ペラギウスは、神の被造物である人間の本性は善であり、自由意志を用いることができると考えました。たとえ原罪によって弱くなったとしても人間の本性は信頼に足るものであり、人間は自らの力で善を意志することができ、また悪を意志すれば罰せられると信じた。しかしアウグスティヌスは、原罪による罰の影響を強調し、キリストの贖罪の後でも人間は悪を意志することはあっても、善を意志する力をもたないと考えました。つまり信仰を意志することもまったく神の恩恵によるのであって人間の意志が働く余地はなく、救済されるかどうかはあらかじめ定められているといういわゆる予定説を説きました。⁽¹³⁾

人間は原罪によって墮落してしまっているので悪にしか傾くことがないというかなり悲観的な人間観を、ルターはアウグステイヌスと共有しています。しかしエラスムスの人間観は、ヒューマニストとして、ルネサンスのピーコ・デラ・ミランドラの『人間の尊厳について』に表現されるような、神と獣の間にあつて、どちらになることも自由に選ぶことができるといった人間像に近いものでした。初期の著作『キリスト教兵士提要』には古代教父オリゲネスの影響を強く受けた霊・魂・肉の三つの区分が見られます。⁽¹⁴⁾つまり人間の魂は、「老獪な蛇に罪の法則を書き込まれた」肉と、「最善の創造者が自身の精神の原形から、永遠の徳の法を、聖霊によって書き込んだ」霊の間にある中間的な存在であり、霊が求めるものと肉が誘惑するものの中で自由を選択を行いながら自己形成をしていくというものです。さらにエラスムスが重んじていたのは、キリストに倣う生き方です。つまり、キリストの教えと生涯を模範として、漸進的に、その原型に自己を近づけようと努力する生き方です。

これに対しルターは、中間的なものを全く認めません。『奴隸意志論』では、次のように述べています。

キリストが道であり真理であり命であるといわれているのであるから、したがって、対照法によって、キリストでないものはすべて、道でなく誤謬であり、真理でなく虚偽であり、命でなく死であると考えられるから、必然的に「自由意志」はキリストでもなければ、キリストのうちにあるものでもなく、誤謬や虚偽や死に縛られているのである。⁽¹⁵⁾

このあとの文にもキリストとサタン、恩恵と怒り、真実と虚偽、命と死といったように対照性を際立たせる表現が続きます。ルターの人間観は、「罪人にして同時に義人」という言葉で表現されます。人間は、罪によって自分自身では自分を救うことができないう存在であるが、神からの一方的な恩恵によって正しい者とされる。これが彼が強調した義認です。そして人間は、神の恩恵に支えられた自由によって、神と隣人に奉仕

する僕となるというものです。罪人と義人、自由と奉仕、このような対照性を際立たせるとするのがルターの特徴のように思います。

エラスムスは人間を中間的存在と見ていたのに対して、ルターは人間において相反するものを常に重ねて見ていたといえるでしょう。

エラスムスは、早くに両親を亡くし修道院に入りますが、そこでは人間が生み出した文学を愛し、自分でも作品を書いたりしていました。ルターは比較的恵まれた家庭に育ちますが、修道院に入ってから、どんなに熱心に修道士の務めに励んでも神に愛されると思えませんでした。人間性への信頼という点で、対照的な二人の違いは、それぞれの気質によるところが大きいとも思われます。本日のゲストの金博士のご専門であるウイリアム・ジェイムズに言わせれば、柔らかな精神の持ち主と堅い精神の持ち主⁽¹⁶⁾ということになるかもしれません。

二人の共通点にも目を向けておきたいと思います。ルターは人間が自分の行いによって神の救済を得るこ

とを否定し、贖宥状を批判しましたが、エラスムスも内面的な信仰を重んじて、巡礼や聖遺物礼拝を批判し、聖職者の墮落を攻撃しました。教会の刷新と信仰の回復という面では一致していた二人でした。ただキリスト教徒の一致を守ろうとしたエラスムスの願いもむなしく、ルターの行動は、教会を分裂させることになりました。

むすびにかえて――

『義認の教理に関する共同宣言』

自由意志と恩恵の問題は、エラスムスとルター以後も、さまざまな形でキリスト教の歴史に現れてきました。近年、一つの大きな出来事がありました。一九九九年十月三十一日、ルーテル世界連盟とローマ・カトリック教会が『義認の教理に関する共同宣言』に共に署名したのです。これは、二十世紀のエキュメニズム（教会一致）運動の最大の成果と言われているものです。紆余曲折を経ながらも対話を積み重ね、まだ多くの課題が残っていることをお互いに認めながら義認の

教理について基本的な合意に達したのでした。この『共同宣言』には、十六世紀に双方から行われた教理的な断罪は無効になると書いてあります。⁽¹⁷⁾ また、義認については双方が共に「義認はただ神の恵みによってのみもたらされる」と告白するとしています。⁽¹⁸⁾ そしてこの点についてのカトリックの見解が次のように書いてあります。

カトリック側が、人間は、人を義とする神の行為に同意することによって、義認への準備と受容において神の義認の業に「協働する」と言うとき、彼らはそのような人格的な同意そのものに、恵みの働きを見ているのであって、それを人間が自分の能力によって行う行為だと見ているのではない。⁽¹⁹⁾

これは、本稿でも見たエラスムスが正統な教会のものとして紹介していた考え方と同じことを言っているように思います。ルーテル側の見解は次のようにあります。

ルーテル側は、人間が恵みの働きを拒絶しうることを否定するのではない。彼らが、人間は義認をただ受動的にのみ (mere passive) 受け取ることができる⁽²⁰⁾と強調するとき、それによって自分自身の義認への貢献の可能性を除外する。しかし、神の言葉そのものによって引き起こされる信仰において、完全な人格的な参与があることを否定するものではない。⁽²⁰⁾

ルーテル側が「信仰のみ」と強調するのを聞いて、それはどんなに受動的であつても人間側からの働きではないかと思うのは誤解であり、その信仰は人間の外からやってくる神の言葉によって造り出されるものとされているのです。カトリック側がいう神への同意もルーテル側がいう信仰も神によって引き起こされるという点で変わりありません。

このような『共同宣言』の合意点は、エラスムスとルター⁽²¹⁾の論争でいえば、かぎりなくルター⁽²²⁾の立場の近

くにあるといえるでしょう。救いにおける自由意志の役割をかすかながら残そうとしたエラスムスは、この義認の教理についての合意に懸念をもつかも知れませんが。それは人間の責任といったものであり、『共同宣言』に残された課題の一つでもある「罪」の問題とも深く関わるものでしょう。⁽²¹⁾ただ、両陣営から責められながら教会の分裂を何としても回避するべきだと考えていたエラスムスにとって、ルーテル世界連盟とカトリック教会の歩み寄りはいへん喜ばしいことのはずです。この歩み寄りまでのおよそ五百年近くの歴史を思うとき、恩恵と自由意志に対する考え方の微妙な差異が多くの人々の対立と分裂へといたるといふ宗教の恐ろしい面にも目を向けていかなければならないと思います。
ご清聴ありがとうございました。

注

- (1) 池田大作『21世紀文明と大乘仏教——海外諸大学講演集——』聖教新聞社、一九九六年、二七頁。
(2) D. Martin Luthers Werke, Weimarer Ausgabe, Bd. 7, SS.

- 142-49, trans. Clarence H. Miller, *An Assertion of All The Articles of Martin Luther Which Were Quite Recently Condemned by a Bull of Leo X*, Article 36, *Collected Works of Erasmus (CWE)*, vol. 76 (Toronto: University of Toronto Press, 1999), 301-10.
- (3) 「ハイデルベルクにおける討論」(二五一八年)『ルター著作選集』久米芳也・徳善義和訳、ルター研究所編、教文館、二〇〇五年、二九頁。
- (4) アウグスティヌス「霊と文字」『アウグスティヌス著作集9ペラギウス派駁論集(1)』金子晴勇訳、教文館、一九七九年、一七頁。
- (5) 共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』日本聖書協会、二〇一四年「一九八八年」。以下、聖書からの引用はすべてこの新共同訳による。
- (6) *De libero arbitrio disputatio sine collatio*. なおルターの『主張』の正式タイトルは「レオ十世の最新の大勅書によって断罪された、マルティン・ルターの全箇条の主張」(*Assertio omnium articulorum Martini Lutheri per bullam Leonis X. novissimum damnatorum*)
- (7) 『評論・自由意志について』、『ルター著作集第一集』7、山内宣訳、聖文舎、一九六六年、六八頁。
- (8) 同前、七九頁。
- (9) 同前、七七—七八頁。
- (10) 同前、八五頁。
- (11) 同前、一一〇—一一頁。

- (12) 『奴隸的意志について』、『ルター著作集第一集』7、山内宣訳、聖文舎、一九六六年、一六八頁。
- (13) 中川純男・松崎一平「アウグスティヌス」『哲学の歴史3 神との対話』中川純男編、中央公論新社、二〇〇八年、一七〇—一九〇頁。
- (14) 「エンキリディオン」『宗教改革著作集』第二巻、金子晴勇訳、教文館、一九八九年、五三頁。
- (15) 前掲、『奴隸的意志について』四七一頁。
- (16) 'The Present Dilemma in Philosophy', in John J. McDermott, ed., *The Writings of William James: A Comprehensive Edition* (Chicago: The University of Chicago Press, 1977), 365. 「ウィリアム・ジェイムズ『プラグマティズム』
- (17) 梶田啓三郎訳、岩波文庫、二〇一〇年、一九—二二頁」
ローマ・カトリック教会／ルーテル世界連盟『義認の教理に関する共同宣言』ルーテル／ローマ・カトリック共同委員会訳、教文館、二〇〇四年、三一頁。
- (18) 同前、三四頁。
- (19) 同前、三五頁。
- (20) 同前、三五頁。
- (21) 江口再起「義認論の諸問題—「ルーテル・カトリック義認の教理の共同宣言」をめぐる—」『ルター研究』7、ルーテル学院大学、二〇〇一年、一八二—一八六頁。

(やぎぬま まさひろ／東洋哲学研究所研究員)